

[書 評]

アダム・ロバーツ (Adam Roberts) 著

『フレドリック・ジェイムソン (Fredric Jameson)』を読む

遠藤英樹

I はじめに

フレドリック・ジェイムソンは1934年生まれで、イエール大学で博士号(フランス文学)を取得後、ハーバード大学、イエール大学、デューク大学等で教鞭をとってきた。彼は、現代アメリカを代表する文化批評家の一人であり、マルクス主義と精神分析学から多くの影響を受けながら幅広い分野で仕事をしている。彼には、博士論文をもとにした『サルトル』(1961)、『マルクスと形式』(1971)、『言語の牢獄』(1972)、『攻撃性の寓話』(1979)、『政治的無意識』(1981)、『理論のイデオロギー』(1988)、『後期マルクス主義』(1990)、『映像の記号学』(1990)、『ポストモダニズム、あるいは後期資本主義の文化的ロジック』(1991)、『地政学的美学』(1992)、『時間の種子』(1994)、『ブレヒトと方法』(1998)、『カルチュラル・ターン』(1998)等、多数の著書があり、非常に重要な思想家の一人でありながら、彼の全体像を把握することは困難だとされてきた。

本書は、そうしたジェイムソンの全体像を的確かつ簡潔にまとめたものである。その点で本書は今後、ジェイムソンを理解していく上で有効なテキストになると思われる。本書『フレドリック・ジェイムソン』を執筆したアダム・ロバーツは現在、ロンドン大学で講師として教鞭をとっているが、評者は、こうした彼の仕事を紹介することによって本書を翻訳出版するというのも含め、ジェイムソンを理解しようとする動きが一層高まることを期待している。

II 本書の構成

では、本書の構成について見ていくことにしよう。本書の目次を見ると、以下のような構成になっているのが分かる。

I部 なぜジェイムソンか?

Why Jameson?

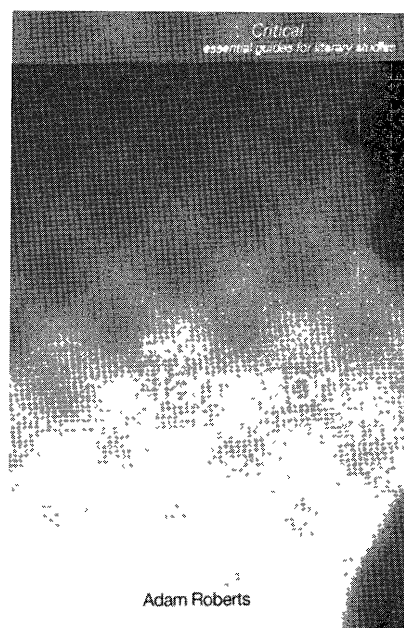
II部 基本となる考え方

Key Ideas

1 マルクス主義的コンテキスト

Marxist Context

2 ジェイムソンのマルクス主義: 『マルクス主義と形式』『後期マルクス主義』



アダム・ロバーツ著
『フレドリック・ジェイムソン』

Jameson's Marxism Marxism and Form and Late Marxism

3 フロイトとラカン・『政治的無意識』に向けて

Freud and Lacan towards The Political Unconscious

4 『政治的無意識』

The Political Unconscious

5 モタニズムとユートピア・『攻撃性の寓話』

Modernism and Utopia Fables of Aggression

6 ポストモタニズム、あるいは後期資本主義の文化的ロジック

Postmodernism, or the Cultural Logic of Late Capitalism

7 映画をめぐるジェイムソン 『映像の記号学』『地政学的美学』

Jameson on cinema Signatures of the Visible and The Geopolitical Aesthetic

Ⅲ部 ジェイムソン以降

After Jameson

さらにジェイムソンを知るための参考図書

Further Reading

本書はまずジェイムソンを扱う現代的意義について述べた後、ジェイムソンのいくつかの著作に見られる重要な考え方をまとめている。その上で、ジェイムソン以降にどのような思想上の流れが展開されつつあるのかを素描し、今後の研究において重要となる書物をリストアップしている。

Ⅲ ジェイムソンの基本的な考え方

以上のような内容をもつ本書において、ここでは特にⅡ部に的を絞り、ジェイムソンの「基本となる考え方」がいかにまとめられているのかを簡単に紹介していくことにしよう。

まず「マルクス主義的コンテキスト」では、ジェイムソンの著作に共通して見られる概念や思考法としてマルクス主義があり、唯物論、イデオロギー、弁証法、土台と上部構造の関係などがキーワードとなっていることが指摘されている。

次に「ジェイムソンのマルクス主義・『マルクス主義と形式』『後期マルクス主義』」では、ジェイムソンによるマルクス主義的批評の目的が論じられる。それによれば、批評の目的は文化が生み出す書物、演劇、芸術を「解釈」することであり、「解釈のあり方を説明」することにあるとされる。その際、いかに商品化が今日の文化を支配しているのかを理解し、解釈が歴史に根ざしたものであることを把握するべきだとジェイムソンは言う。

「フロイトとラカン・『政治的無意識』に向けて」では、精神分析学の理論のうち、ジェイムソンを理解する上で重要となる要素がいくつかあると指摘される。例えば、フロイトは「意識」「無意識」「自我と超自我」のモデルをたてているか、中でも特に「無意識」が彼の理論で大きな位置をしめる。またフロイトを展開したラカンの理論では、前言語的な「想像界」、より構造化された「象徴界」、完璧な「現実界」のうち、「現実界」こそが歴史であり、批評の主要なポイントになるとジェイムソンは考えている。このように、精神分析学とマルクス主義、その両方を解釈をめぐるジェイムソンの考え方においてポイントになることが強調される。

以上の議論をうけて、次に「『政治的無意識』」のテーマが要約されることになる。『政治的無意識』は

ジェイムソンの主著の一つであるが、ここでは批評のあり方が再考され、小説や詩の表面にあらわれる要素を超え、批評はフロイト的な分析によりつつ、テキストの無意識を探る必要があるというジェイムソンの主張が示される。さらにはテキストの意味は単に発見されるのではなく創られるのであり、解釈はテキストを歴史へと開示することだという彼の議論も参照される。

「モダニズムとユートピア：『攻撃性の寓話』」では、現代社会におけるモダニズムのあり方について説明され、ジェイムソンにおけるユートピア思想が浮彫りにされる。

「ポストモダニズム、あるいは後期資本主義の文化的ロジック」では、ジェイムソンがポストモダニズムの問題を単なる美学上の問題として扱っているのではなく、政治的なロジックと絡めて論じていることが指摘される。彼にとって、ポストモダニズムの概念は単なるスタイルではなく歴史の問題なのである。その際、彼が考察の武器とするのは、マルクス主義、特にアルチュセールのマルクス主義であり、また精神分析学である。

最後に「映画をめぐるジェイムソン：『映像の記号学』『地政学的美学』」では、映画に関する彼の考察がまとめられている。映画は特定の歴史的・イデオロギックな状況の産物として読まれるべきである。こうした主張をジェイムソンは述べ、『政治的無意識』を一層洗練した形の「地政学的無意識」の議論を展開している。

IV 社会学におけるジェイムソンの意義

人びとが日々の暮らしの中でたえず創りあげている社会的リアリティを発見し語ること、これが社会学の大切な営みである。社会的な現象や出来事は、語られてはじめて意味を持つ。語られることのない社会的な現象や出来事はそもそも、私たちにとって何の意味もないだろう。

以上のように考えるなら、「語る」という行為と社会的リアリティは切り離すことかできないと言えるだろう。語ることから離れて、社会的リアリティは存在しない。「語る」という行為は社会的リアリティを客観的に写しとる透明な鏡ではなく、それ自体がある位相の社会的リアリティを、つまりは「つくられたもの」を生みだしてしまうものなのだ。このことについて非常に自覚的に考察を展開したものとして、JクリフォードとGマークスの編集による『文化を書く』という論文集がある。この論文集は社会学者というより、どちらかと言えば文化人類学者の手になるものだが、しかし上のような問題が鋭く論じられている。この書物によれば、民族の社会組織や宗教、価値観など、そうしたものを文化人類学者がフィールドワークで見出し、それを正確に、客観的に語ることなどできないと指摘され、そもそも「書くこと」「語ること」それ自体、「つくられたもの」としての何かを生むのだと主張されているのだ。

例えば、環境破壊という社会問題は、研究者やマスコミ、生活者を含めた複数の語り手たちが「環境破壊は社会問題である」といった言説を紡ぐことで構築しているものである。すなわち環境破壊という社会問題が客観的に存在しているのではなく、人びとがある現象を環境破壊として語る中で、それが「問題」として生みだされてくる。こうした視点は、社会学では構築主義という考え方に色濃く見ることかできる¹⁾。構築主義とは「社会的な現象や出来事は客観的に存在しているのではなく、人びとの語りや実践の中で構築されるものだとする」考え方なのである。

以上のように考えるなら、社会は一つのテキストだと見ることができる²⁾。とするならば、そこには常にテキストをいかに語るのかという「語り」の問題がついてまわることになるだろう。「語り」は、誰か、どの視点から、何のために、いつ、どこで、いかに語るのかといった「語り方」あるいは「解釈の仕方」を常に内包している。これによって語られる社会的リアリティも大きく変わってしまうのだ。

その意味で「テキストとしての社会」は、誰か、との視点から、何のために、いつ、どこで、いかに語るのかといった「語り方」あるいは「解釈の仕方」を生みだしている何らかの社会性・制度性・歴史性と必ず結びついているものなのである。それゆえ、「テキストとしての社会」を分析するにはテキスト内部にととまることなく、テキストを社会化・制度化・歴史化していく必要があるのだ。テキストを「つねに歴史化せよ!」。これがシェイムソンの分析におけるスローガンである。これを前面にすえて多様な社会的・文化的現象を分析するシェイムソンは、この点で社会学において今以上に注目されるべき研究者であると思われる。本書は、こうしたシェイムソンの難解とも言える議論を非常に適切かつ分かりやすくまとめてくれている点で意義のある入門書だと言えよう。

【注】

- 1) “constructionism” という同じ原語をもち同じ系譜に位置つけられるにも関わらず、日本の社会学では「構築主義」と「構成主義」という訳語をあて二つを区別しようとする論者も多い（例えば千田2001、赤川2001）。それによれば「構築主義」の方は社会的な現象や出来事を客観的に記述することか可能とする「客観主義」に対抗するものとしてあり、「構成主義」の方は社会的な現象や出来事は本来的・本質的に決定されてしまっているのたとする「本質主義」（例えば性差は生物的な要因によって説明するという言説）に対抗するものとしてあるのたとされる。しかし「社会的な現象や出来事は客観的に存在しているのではなく、人ひとの語りや実践の中で構築されるものとする」考え方は「構築主義」「構成主義」とちらの考え方においてもポイントであって、そうたとすれば、両者を区別することか果たして生産的な議論にとこまで結びつくのか評者には疑問である。
- 2) 「語り方」も含めて社会をレトリックの問題として論じたものに R フラウンの著書がある（Brown1987=1989）。

【参考文献】

- ・赤川学（2001）「言説分析と構築主義」上野千鶴子（編）『構築主義とは何か』（pp 63-83）東京 勁草書房
- ・Brown, R H（1987）Society as Text Essays on Rhetoric, Reason, and Reality Chicago University of Chicago Press 安江孝司・小林修一訳（1989）『テキストとしての社会—ポストモタンの社会像』東京 紀伊国屋書店
- ・Clifford, J and Marcus G eds（1986）Writing Culture The Poetics and Politics of Ethnography Berkeley University of California Press 春日直樹他訳（1996）『文化を書く』東京 紀伊国屋書店
- ・Roberts, A（2000）Fredric Jameson London and New York Routledge
- ・千田有紀（2001）「構築主義の系譜学」上野千鶴子（編）『構築主義とは何か』（pp 1-41）東京 勁草書房